

「ヒント」と言うた。ヒントは、便壺、即ち便の壺、便を「ヒン」と訛り、壺の「ボ」を捨て「ヒント」便所。

⑳ (ミジャァー 台所 流し)

台所を、「ミジャァー」と言うた。台所(流し)は調理場で、水を必要とする所であり、何時も水がある屋だから水屋 流し、と訛った。

㉑ (トロジ 戸露地)

家の入口の前の、戸がある露地を「トロジ」と言った。トロジは屋根があるが、外側が囲って無いので雨露が内の地に入って濡れるから 戸露地。

㉒ (シボド 火元 囲炉裏)

囲炉裏を「シボド」と言うた。「シボド」は家の中の、ゆかを仕切つて、暖房を取り、煮焚きする所で火の元だから火元が訛り 流し、と訛った。

㉓ (ヒント 銭湯)

今でも老人は、「ヒント」に行くと言うが、「ヒント」は銭(お金)を出して入る湯屋であるから、銭湯が訛り、「ヒント」となった。

嘉瀬言葉は一般的に悪い言葉の代名詞の様に思われがちだが、一つの単語を拾って見ると、語の起源が成立し、独特の言葉が生まれたと思う。

津軽の言葉・嘉瀬言葉

山 中 正 津

「ドサ、ユサ」、これは、日本で一番短い会話だ、とテレビからラジオの放送で紹介されていたのを聞いた事があるが、勿論津軽の方言であつて、その意味は、道で二人の人が行き会った時のあいさつで、「どちらへ?」「お湯へ」ということで、雪国の人たちは、寒い季節極端に口数が少なくなり、「ドサ、ユサ」で、二人の対話を通ずるのだ、と解説していた。

津軽には、まだ短い言葉がある。

「カ、ケ」、これは、相手はあるが発言するのは一人。この意味は、「どうぞ、喰べなさい」と、いう事で、この言葉は、多くは同僚が、目の者に対して使われる言葉だと思う。「カ」与えるから「ケ」喰べなさい。

私は、或る時、金木の町の若い青年たちと一ぱい呑みながら雑談をしていた時、「ナ」「ワ」とかの言葉の語源について話題が移った時、その青年は、

「嘉瀬には特別な言葉があるな。例えば嘉瀬の人たちは、天気が良いことを『空良い』と言う。津軽弁にも使わない言葉が、まだあるのではないか。」と、言った。

私は、なるほど、われわれが何んとも思わず日常使っている言葉も、他町村の人からは異常に聞える嘉瀬言葉があるのだなあ、と思った。

○オドデナ 一昨日

○ジラベ 平均して。公平に。

戦時中、物資が統制になって、町内毎に配給物を分ける時代が続いた。ある町内で、「本日の配給物は、ジラベに分けるべし」と云つたというが、語源は解らない。

○オンベ 物知り。ヤユして言う事もある。

○ケル くれる。(例、嫁ケル)

○カマシ かきまぜる。

○ウダデ とんでもない。

○ヤバチ 汚ない。

○バグル 交換する。

○デイゴ 太鼓。

○デイゴ 大根。

私が小学校の頃、近所に○○という同年輩の友達があつた。何故か、口喧嘩などした時、「○○デイゴ、生デイゴ、生木で叩けば、ボコランボコラン」と囃子立てたのだった。デイゴは、太鼓の意味でもあり、大根の意味でもあつた。それぞれの名詞が訛つたものだろう。

○ハッカラ 早くも。

○アデクセ 取るに足らない。

○エフリコキ 見栄っぱり。

○イズイ 何処か痛みかゆい。(例、マナグサゴミ入ってイズイ)

○ウルダグ あわてふためく。(例、ウルダグホイド(乞食)ど、は

ばがね女ゴは、デンコ(ゼニコ)にならない)

○デンコ お金

次に掲げる言葉は、嘉瀬言葉だけでなく津軽言葉なのかも知れないが私は、孫にこの幾つかの言葉を発して、意味がわかるかと聞いたら、殆んどわからない。息子は、七割ぐらひは聞き知っているが、三割ぐらひはわからないという。

今は、標準語が一般化して、土地の方言がだんだん忘れられてきている事がわかる。

わが、ふるさとを探る会では、今のうちに普通用いていた言葉を記録に残して置くべきだ、というのが、今回の企画だと思う。

私が、幼い頃育つた町内は、「ゲアログ町」と呼ばれた。正式な町内名ではない。町内の端は、田圃や苗代があり、蛙が、ゲロ、ゲロと鳴くからゲアログ町なのかと思つていたら、それも含めた貧民街を指しているようでもある。これは昔からあつた言葉とは違ふかも知れないが、五十年ほど前から使われていたので嘉瀬言葉の中に掲げておく。

○ドサ、ユサ どちらへ?、お湯へ。

○カ、ケ どうぞ、喰べなさい。

○ゲアログ 蛙の卵を含むオタマジャクシ。

○ボゴル 取組み合いをする。

○ヤガグル 物を取り合う。

○ソライイ 空が良い。晴天の事。

○キビイ 嬉しい。

○ジュナイグ やれ 都合良くやれ。

○アタムシ 惜しい。

○アズマシイ 気持が良い。

○アメル 腐りかける。駄目になる。

○オウギラゝゝ大家気分。

○オゴラミゝ威厳のあること。

昔は、小農と大家（オオヤケ）との差は、殿様と足軽ほどもあった。戦争前後、農家の主婦が分不相応な買物などすれば、

「アソコのアッパ、オウギラであれだば、カマドケシだね」などと云ったものだ。

しかし、庶民の切ない願いとして、一生のうち一度ぐらいはオウギラになってみたいものだったろう。

今は、富者も貧者も生活水準は特別な者を除いて等しくなってきたので、オウギラなどという言葉は使われなくなった。

オゴラミある人、これもやはり、昔は、旦那衆を指して言う事が多かった。村の名主、村会議員とか学校長、郵便局長、駅長、産業組合長など長のつく人は、オゴラミがあった。

今は、主権在民で、町会議員とか農協組合長は、オラゴミよりも地域住民に迎合する人が多くなった。

○ビラゝゝビラ（ポスター）

○ミツツドゝしつかりと。

○ガツパゝゝ全部（占有権）。

○ヤツパハマルゝ介入する。

○サベチョゝおしゃべり。

○モチョガスゝくすぐる。

○ノレンレゝ精いっぱい。

「ワ（私）ナ（君）さ知らひでおくと思つて居だども、秋にケヤグ（友達）と山さ葺採るに行つたケヤ、ヤツア（奴）、葺オイテ（生えて）ら

よく、「ナ」は「汝」の略積であり、「ワ」は「吾」の略積であると、東日流外三郡誌（中巻）に「対津軽弁大和弁書」として記載されてある。

参考までに次に掲げる。

☒ 対津軽弁大和弁書

ナとは汝の略積なり。ワとは吾の略積なり。以下対照す。

ヒンチ（セツチン）

ミンジャ（水座）

トロジ（通り路）

シデギ（火付木）

ワラシ（童子）

ヤメソ（山衣着）

トツケケ（灯付木）

ホイド（乞人）

サント（妊産婦）

ヤメド（病人）

ケバル（懸張）

ヤバチ（野蕃人）

ドブサル（人布去ゝ寝るの意なり）

ボンズ（坊主）

テケト（手欠人）

ログボ（六部僧）

シケニシ（介添人）

ホホラ（阿呆等）

カダクラ（かたくな）

シチコ（泉）

ヂシコ（路支）

タケケ（溜池）

ムジシ（無路）

シボド（火保人）

クイヂャメ（食三味）

チャンコロ（唐人）

バンタロ（見派番）

ヤマド（水軍）

ウミド（水軍）

此の他多くの漢字に当てみるに大和語に属すは津軽語なり、依て津軽の大古なる津保化族より荒吐族、安東一族に渡る間大和の交流及び落人の遺したるは津軽弁なり。

どこ見だきや、ワ、ここガツパだど。フトジ（一語）に見つけども、ワ、それさヤツパハマテも、あのサベチョの事だはんで、フト（人）さ何んでサベって（言つて）歩くか、わからねはで、シトしねばて、今度だは何やるにしてもミツツドかかって、ノレンレやつてけねばマイネ（駄目）どもてらじゃ。まあ、ヤツばだばモチョガステ殺してけねいどもてらじゃ。」

これが前記の言葉を使った会話である。

○ハンカクセゝ生半可（なまかじり）。

○ジョロツトしてないゝ正常でない。

○ミンジャゝキッチン（炊事場）水座の意か。

○ミンジャスイゝ炊事場から流す水（家庭雑排水）

○ヒンチゝ雪隠（便所）

○シボドゝ囲炉裏。

○カワアヅゝ厚顔（面の皮が厚い）

○ツケラケツトゝ凶々しい（行為に對し我関せずの態度）

○ツボケゝ反抗する者（自分の意に沿わない相手）

昔の選挙の話

「あのツボケ、ベラ張りやらへだきや、敵の家さ入ってミンジャねいでドブログ（濁酒）まぐらてせめ、小便しね立ってヒンチさ行かねでミンジャスイさ落ちできたど、おいらの家のシボドねいて汚いだ着物干してツケラツトしてらずや、本当ねカワアヅ者だね。」

と、いう事にもなる。

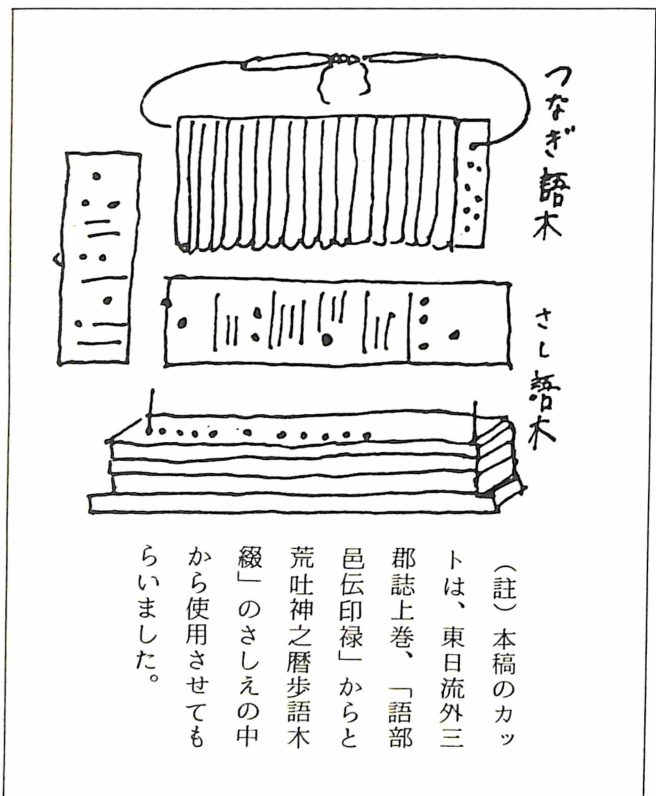
津軽弁というか、嘉瀬言葉というか、まだまだある筈だが、以上思いついたまま記してみた。

寛政庚申甲年

秋田 孝季

東日流外三郡誌は、寛政五年（一七九三年）二月、羽州（秋田県）土崎在任者秋田孝季と奥州（現青森県）東日流（津軽）存住和田長三郎によつて、安東一族の往古歴を探研するため日本八十二ヶ国を巡脚し、文献及伝説諸翁姥の憶語り等を写筆したものとされている。

言葉の語源は学者にまかせて置くとして、何百年も続いてきた津軽弁、嘉瀬言葉は、その時代時代でその地域において充分に意思の疎通がはかられたものであり、今でもわれわれの年代の者は使っているのである。



古き仏壇を尋ねて

木村 治利

昭和六十年十一月中旬から、村の各家の中にある最も古い、由緒ある仏壇を尋ね歩き、記録しておくことにしました。

仏壇は、仏像を安置し、礼拝供養を行なう壇の意でしたが、今では仏像や祖先の位牌などを安置する家屋内の一家族用の厨子くしを称するようになっていきます。

仏壇といわれるようになったのは、日本書記に、各家に仏壇設置を勧めた記事があるところから七二〇年頃といわれています。

平安朝には貴族が競って住宅を寺院化するようになり、鎌倉期に庶民階級の家で信仰を説くようになってから、この内仏堂が一般化されました。

さらに江戸幕府のキリスト教禁止の一方策から宗門改しゅうもんあらためを僧に依託し、一年毎に各人の宗旨を調べ、更にその寺の証明を行なわしめたものです。仏壇のない家は邪宗門として告発されたので、仏壇の設置は強制的に行なわれるようになりました。

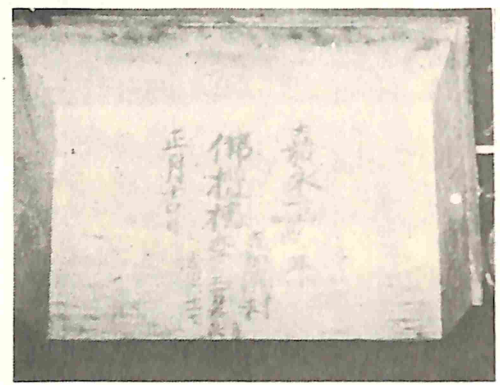
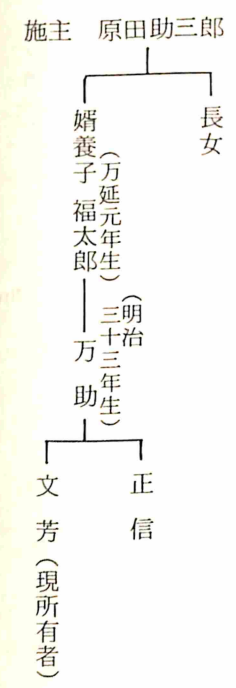
仏壇の構造は一様ではありませんが、中央に本尊仏その他を安置し、両側には祖先の位牌や宗門の祖師像などを置き、花瓶、香炉、燭台、過去帳などが配されるようになっていきます。

(一)
中柏木、原田文芳氏宅の仏壇は、一八四九年(嘉永二年正月)今から一三六年前に嘉瀬村の木工三上万太郎当年六十一歳が施工した古い仏壇である。ヒバ造り、釘は使用せず組立式になっている。

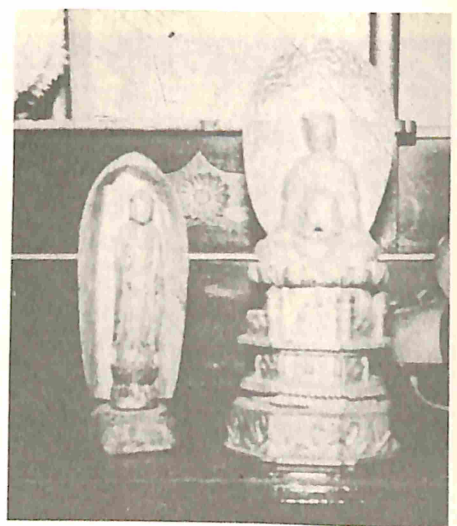


中柏木 原田文芳氏所有の仏壇
巾(100cm) 高さ(152cm) 奥行(67cm)

で広めたから、道元の仏像であろうか、須弥壇じゆみだんは平安時代以後の四角の箱形になっており、嘉瀬の木工が施工しているところに、この仏壇は意義深い。



須弥壇(箱形)



手作りの仏像
右 釈迦如来
左 菩薩像



原田 文芳氏



欄間

「いごく穴」の供養祭と保存

今から二〇〇年前、天明の飢饉によって嘉瀬村民の多くが餓死、亡村の状態となりました。餓死者を埋葬する人としてなく、村はづれに大きな穴を掘って埋めました。それが「いごく穴」です。嘉瀬ふるさとを探る会では、昭和五十九年七月二十九日馬頭観音の「いごく穴」供養祭を行いました。

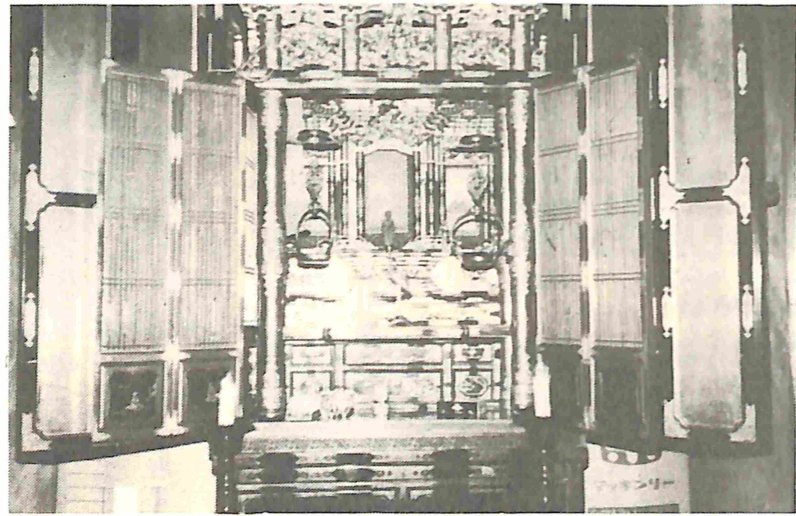
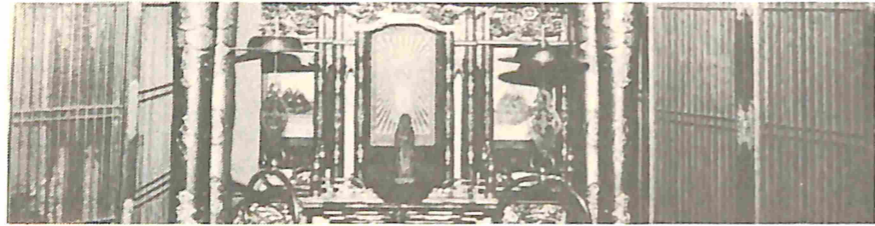
会員のほか、講中代表の松川義勝さんらもおいでになり、妙光庵木村住職の説経に始まり、しめやかに供養祭がとり行なわれました。終了後、白川食堂において、「天明の飢饉と、いごく穴について」語り合いました。

幾多の冷害や飢饉をのり越え確立された現在の農業を、先人たちはどうみていることであろう。

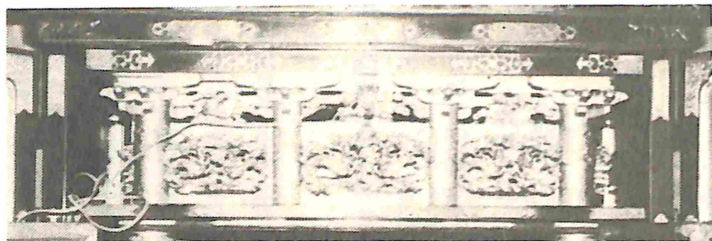
馬頭観音の周囲は講中の人達の奉仕で、盛土し、その上に杉の苗木を植え附近にあった「いごく穴」もすっかり整地され、見違える程奇麗になった。

昭和五十九年十二月一日、嘉瀬ふるさとを探る会では、講中の方々と話し合い、「いごく穴」を現状のまま保存することにし、会員の奉仕で「いごく穴」の場所を地質などで調べ、確認し、角材で枠を組み誰にでもわかるように板木を建て保存した。

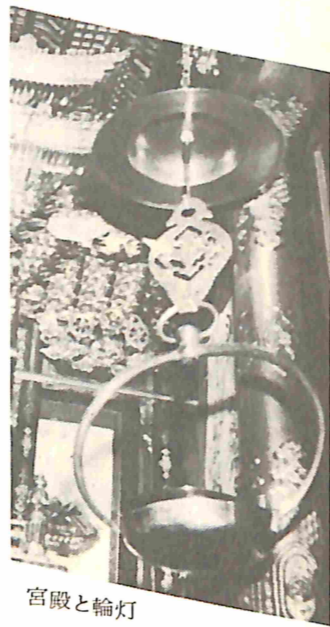
阿弥陀如来像



木下俊蔵氏所有 巾 85cm 高さ 182cm 奥行 72cm



欄 間



宮殿と輪灯

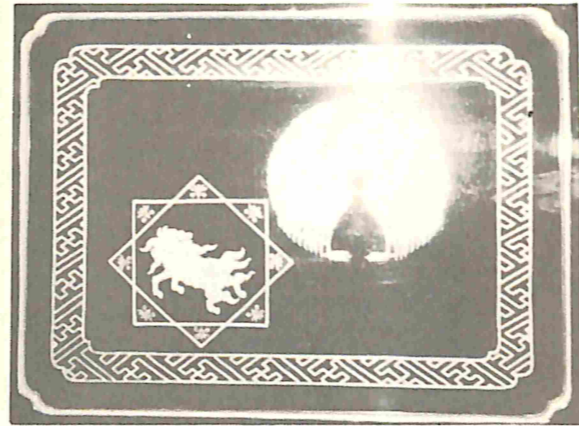
嘉瀬 木下俊蔵氏宅の仏壇は、昭和四十年金木町伊藤清逸氏（製材所）より譲り受けたもので、製作年月等不詳である。木下家は伊藤家と同じ門徒宗であり、寺は飯詰の法林寺、本山は東本願寺とのことである。ご本尊は木彫り十四センチの阿弥陀如来の立像で、お脇掛右に親らん上人、左に蓮如上人が掛けてあった。仏壇には大きな輪灯が左右に垂れ内陣を装飾している。

(三)

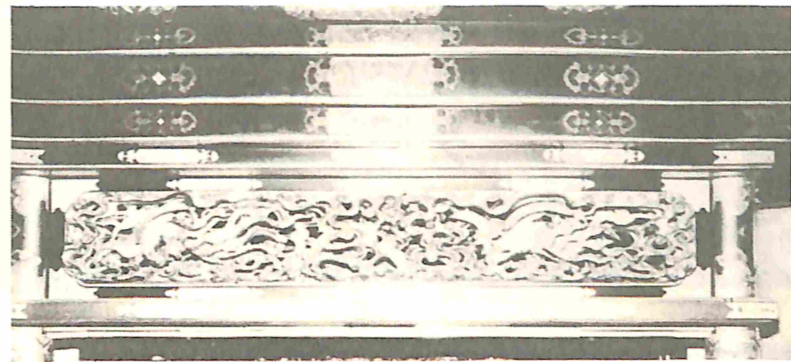
欄間、金障子、お扉（折戸）の金具すべてが金めっきで飾りたて宮殿は桃山時代の様式で絢爛豪華である。須弥壇は、鎌倉時代以後箱型から宋様式で腹凹式になったが、此の須弥壇も腹凹式であるところから、文久から慶応時代に造られたものと思われる。

須弥壇（しゅみだん）

インドの仏説では、スメル（須弥）山の頂には帝釈天の住む忉利天宮があるという。ひと夏、仏陀が忉利天上にのぼって、母のために説法し、これに起源して仏像が始めて彫刻されたという言葉伝えに基づいて須弥山を仏像の台座としたものとみられる。



須弥壇（しゅみだん）

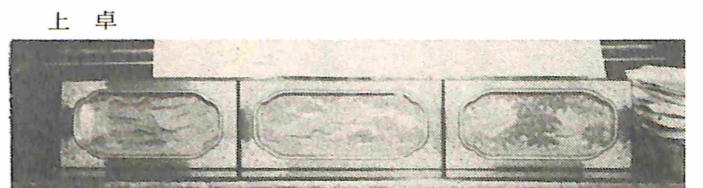


宮殿の彫刻

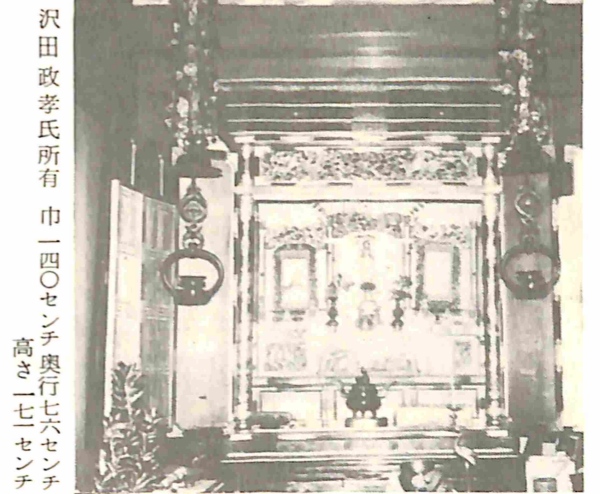
嘉瀬 沢田政孝氏宅の仏壇は、一八六六年（慶応二年）新潟県で製作され、日本海を船で十三湊に運ばれた。中里町大沢内地主大川家が米九百俵（三年間で分納した）で買入した程の豪華なものである。昭和二十四年沢田家が、大川家より譲り受けた。浄土真宗で京都の東本願寺が本山とされている。ご本尊は方便法身尊形で悟りの世界、一如法界、真如法性から一切衆生を救うために本願を立てた阿弥陀如来の立像（四十三センチ）が輝やいている。お脇掛左は蓮如上人（えとう大師）右は見真大師（親らん上人）。須弥壇、上卓、前卓など総漆塗り、欄間の彫刻は金めっきの金具で飾り、宮殿は桃山風の様式を示している。仏殿の軒には宝相華文金銅切抜小片を連ねて瓔珞が垂れ、一層はなやかである。神仏混合の時代らしく、燭台は鶴亀で花瓶や香炉の絵図も派手で色彩のこいものが用いられている。

厨子（ずし）

小形の仏像を安置するもので、仏ガンともいう。多くは木材をもって屋根形あるいは筒形を作り、正面に扉をつけ、総体に漆を塗り、金箔（きんぱく）を押ししたり、蒔絵（まきえ）を施したりする。厨子はもと厨房（ちゅうぼう）において調度品を納める棚のようなものを称したが、後にそれが仏ガンに似ているところから仏像を安置すべく一種の形を工夫したものとされる。（百科事典より）



上卓



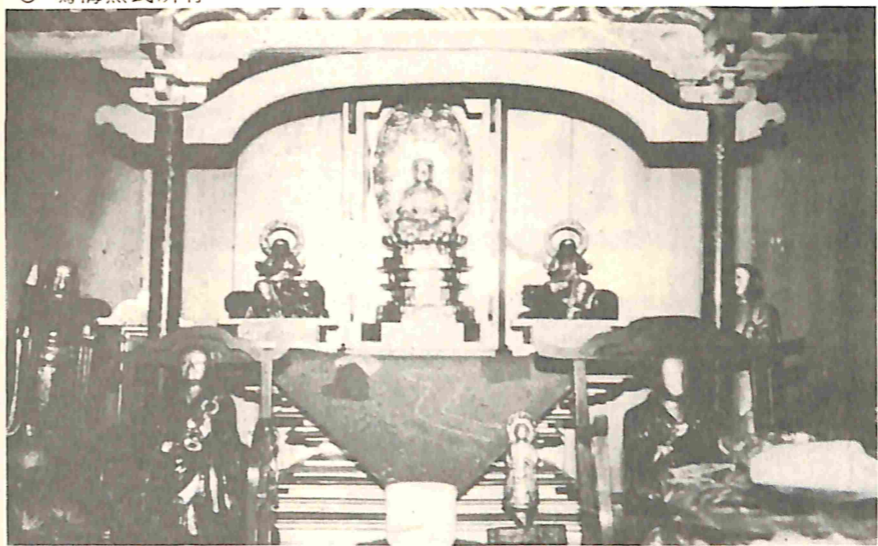
沢田政孝氏所有 巾一四〇センチ奥行七六センチ 高さ一七二センチ

(二)

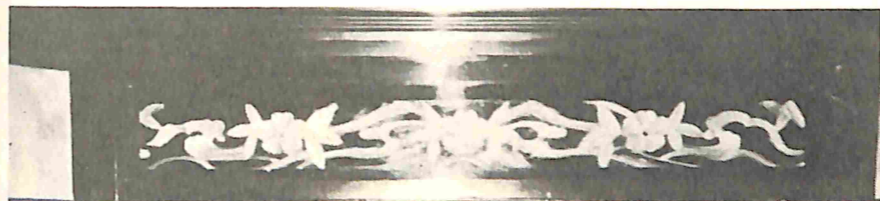


幼児の仏像

○ 鳴海勲氏所有



上段 左 普賢菩薩 中 釈迦如来 右 文殊菩薩
下段 左 太祖常濟大師 右 高祖常陽大師
巾 127cm 高さ 161cm 奥行 79cm



欄間の彫刻

(四)

嘉瀬 鳴海勲氏宅の仏壇は、一八二四年(文政八年六月)大工櫛引久右エ門が施工者となっている。曹洞宗は供物が多く、しかも鳴海家は旧家だけに仏壇はさすがに大きい。須弥壇がとくに大きく作られている。ご本尊は釈迦如来の坐像が輝やき、右に文殊菩薩、左に普賢菩薩が並びその下右に高祖常陽大師、左に太祖常濟大師の立像が厳しい。

仏殿の中には、施主が俗名四十五人の名札を入れた位牌函や過去帳があった。

宝永元年十月二十三日(一七〇四)長忠栄松大姉以下、享保一宝暦一安永一文化一天保と命日、年令、俗名等、詳細に記されている。

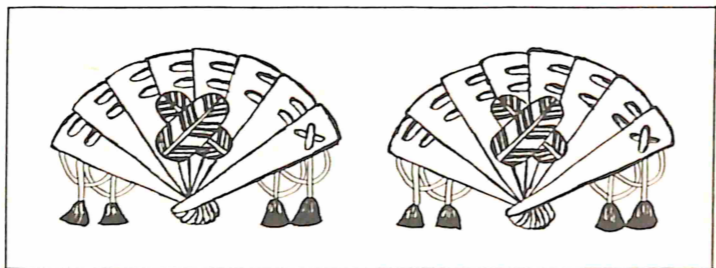
大姉は優婆夷といわれ、僧の生活を援助しつつ在家のまま仏教を实践する女性のことである。木彫の幼児の仏像は、一八一七年(文化十三年三月)四才で亡くなった善司の立像と思われる。

真宗お内仏のお給仕と心得から

仏のみ名を称える称念仏は、だれでも、仏法に帰し仏恩をよろこびまたは人生に明るさを失った時、希望に輝くときいつでも、どんな場合でも念仏します。

したがって身に合掌礼拝するのは、どこでも、どんな時でもよいわけですが、合掌礼拝という身の形をとるには、やはり形のあるものを拝することによって、もっともこの身に自然にすなおに拝されるというのが、私たちのおのずからなるわざであります。

家庭に仏壇を安置し、ご本尊をおかけ申して朝夕礼拝、勤行するといふ真宗のご門徒のうるわしくもおごそかな奥床しい慣習は、いよいよ大切にしたいものであります。

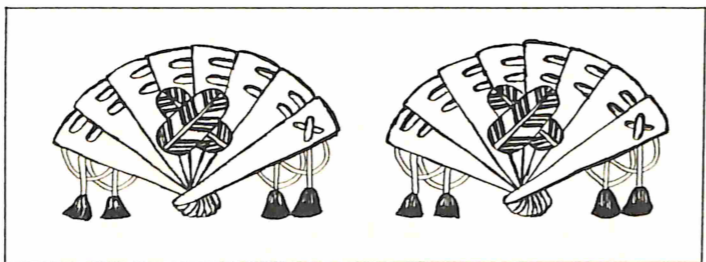


(特別読物)

東日流外三郡を採る研究

親潮の流れ

有馬太郎



亀ヶ丘遺跡として知られる旧館岡の森より出土された縄文時代の土器は、現代の私たちに何を語っているのだろうか、この名は後世に亀が出てきた丘であるから『亀ヶ丘』と名づけられた。

また、館(城)のあった丘で、安東時代に築かれた湊十三の南の護りのやかたのあった処でもある。この地より出土された土器は世界的に同年代のものとは比べて、最っともすぐれていると云われる。

このことは、その技術的にも文化が非常に高いものであることが立証でき、今日まで出てきた数千点の古代の遺物こそが、私達の祖先がそこに残した生活の足跡であり、優秀な民族であったことが立証でき得、また、その土器に稲の籾がついていたことは学会においても、考古学的にも、三千年六百年以前既に、東日流に稲作農耕が取り入れられていることを実証されたのである。然も、その原種は、タイ国およびインド支那半島を流れるメコン川流域における稲の籾と、同一性のものであることを挙げられている。

今日まで未開の地といわれた東北地方及び北海道にも、史実の求明によって、今後一層の研究課題を提起されてきている。よって、郷土の周辺と、

その位置について考古学的見地より再考してみる必要が、より重要となってきた。

また、当時の先住民族は、どのような生活をしていたのであるか 衣・食・住についても、その一つ一つについて考え、立証されてゆくことこそ、祖先の歩み、郷土の生ひ立ちなのである。

『東日流の誕生』

十三浦の館岡に縄文文化が開いたころ、すでに中国大陸は戦国、春秋時代をすぎ、晋国は破れ、秦の始皇帝が北部を統一していた。このため晋の国大祖王曲沃莊伯其君の皇子である荒吐曲沃公が、東の安らかな浦をめざして亡命してきたという。

この荒吐とは、古代中国の君子公族に祭られる武の神にして、これを別称虎伏之神ともいう。勿論、亡命の君主及び君子一族と共に、同族が多数この安東浦の各所に散在して、生活を営んでいると共に、南方の地より稲をもって仏印、廣東、陽子江、黄河流域、朝鮮を経て日本海各沿岸づたいにたどりついた。南方系の民族も混血しつつ来ていることは動かし難い事実であろう。

生活と文化を築くためには、先づ何よりも食糧であり、稲作農耕については特に保存のきく籾こそが最つとも適している事である。このために稲に結びつく生活がこの亀ヶ丘遺跡に、最もよく表現されている。縄文とは、縄で土類の形をしぼり、巻きつけて器をつくりあげた土器のことであって、縄文時代とはこれをさしているのである。この技術が進むにつれて、更に上期、中期、下期と区別し、世界の遺跡中にこれほどのものは未だ発見されていない点に私たちは重視しなければならない。

稲作農耕が命をつなぐ源であったことは当然で、既に三六〇〇年以前

も次第に飾ることが進歩し、植物性繊維で縫んだものを相当使用していること。特に、糸のつくり方については工夫をこらしていることを知る。また、ムシロ、アキノ、シキノなどの多様な模様を入れて作られていること、はきものでは藁を多く用え、靴などは毛皮を使っている。勿論衣服に馬、鹿の皮を豊富に利用したことは、住時の肉食生活が重要な一面としてとらえられることである。

私たちの祖先は、安東浦地域の自然条件をたくみに生かし、食生活や衣服に豊かな足跡を残していることは、そこに自然に生きた生活文化があったということを知ることができる。

次に住の生活は、どのようにしていただろうか、縄文時代は横穴生活から始まり、やがて立穴となり、弥生時代に入ると、屋根をもつて覆った居住生活となった。穴もしくは洞穴生活は、夏季は最つとも涼しく、冬季は極めて暖いことであった。そのうえ外敵からの安全性が随一であった。勿論当時としても洞穴居住のためには、酸素の供給に通気口を付け、その規模も、大は三階層よりなり、数百人も洞穴に居住していた場所も発見されている。最初の横穴生活では、煮炊や火を使うときは横穴外でなされたが、次第に洞穴に通気性を取り入れてより、洞穴内で火を使うようになった。

この頃の死者の埋葬はすべて土葬として、丘の上に穴をほって埋めて、僅かに複葬品をそろえているものだったが、次第にその規模が大きくなり、特に一族の家長や、王者の埋葬には深く穴を掘り、その上に土、石、砂利と盛り上げ、王者には土偶や埴輪など、複葬品を揃えて相当な場所をとっている。日照田の古墳や、味噌ヶ盛古墳などは、小高い山を形成していた。

より東日流の開発は強力に進められていたのである。

安東浦、十三の岬の谷合いを流れる各河川流域には、稲の栽培が漸次進められていった。食生活のためには、又古代の安東浦を流れる十三本の河川に、鮭、鱒が豊富に入っていたことと、各所で発見された土偶や土器に魚の図型が多く入っていること、遺跡には夫々貝塚があり、貝を採って食べた跡や、魚を煮てた跡が見受けられることなどから、大きな土器は煮炊き用に使われたことが証明されるに至った。

一方広大な原野森林は、野馬や野鹿がたくさん居て、その数十万と記録されている。これが東日流安東氏が敗亡して松前に渡ったとき、舟に乗せて行ったのが、道産馬であり、天然記念物に指定されているカモシカ(アオシシ)は大群棲していたという。湖には又フナ、ハイ、コイ、カズカ、エビ、ドジョウ、ハツ目ウナギなども産していることから、極めて食糧は豊であったと記録されている。

縄文時代の時のほかり方については、日時計として、太陽の光で柱の影を読むためのストーンサークル式のものがある。随所にあつたらうし、近年開拓事業で起耕するたびに見られるのである。

また、縄文の末期からは漆器類も多く使用されているが、古来ウルシは津軽の名物である如く、爛妙漆器も、このころから出品していたことで相当の技術が生れているが、これは中国からか、又は独特に創物されたものか学説上では分かれている。

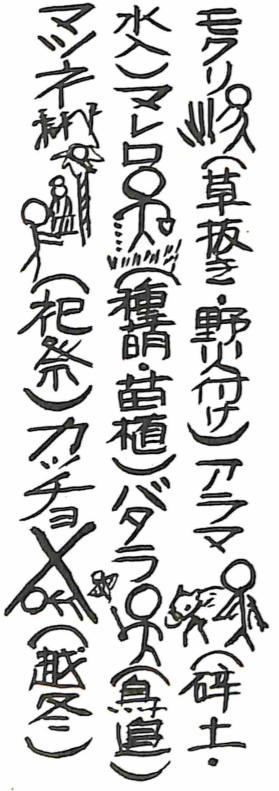
衣についての説に、土偶などのいろいろな模様から判断して、男も女

このように、縄文末期より弥生後期までの二千年は、東日流は全く平和に、名のように、東の安らかな湖のほとりの静かな安東浦時代を形成していた。

『つがるの生いたち』

農耕稲作から始まった安東浦時代より、東日流の治領を広めていった荒吐一族は、やがて奥州六郡へと勢力を伸ばしていった。安東浦一円に次第に稲作が広まって、生活に安らかさをもつようになったことは、種族の勢力を保ち、地域の文化を自ら創造していったのである。

東日流における最初の文化ともいうべき象形文字の発見は、筆者のみでなく郷土のすべての人々の驚異であろう。しかも稲作農耕に起因することである。今日まで語り伝えられ、言われてきた津軽弁として、私たちの生活の中に生きて来たのである。



右記の如く、発掘された蒼海(西海岸)の土器の中にこのような文字が示され出土されたことは、古代より稲作りのために、その課程を正しく表現し、作業順序を伝えている。また注意を引かれることは、既にこの頃から馬を農耕に使用していることであるが、その道具などを考えて